

社説

戰後の教育とて別に新奇なる明案もある可き筈なし唯  
人間のあらゆる能力を研鑽して人類としては前代の歴  
史に藉くよりを附けて將に來らんとする時代に文明の  
光を遺すに足りり個人としては社會に相應の寄附を  
爲して國家の危急とならざるを期し國民としては獨立  
を維持して國家成立の實を全ふし國家の力によりて世  
界の進歩に強力なる寄附を爲するに在るのみ

「往くか、其は好く  
どいつて、亂脈の世  
なし。よせ、危ない  
ものぢやない。  
斯くいひつゝ、懷中より  
包を取出して、隱居は  
押進め、  
「サア此に路用を持つ  
た、今宵の中に立退  
何處へなりと身を隠  
宜い、ナ、押風、詰  
い、大死をしたつ  
らう。  
ものか、だから三年  
も他國へ往つて來る  
の中には世間も知ら  
ぬ。  
吾子に物を貰ふ如く、  
までを調へて、終々と  
含める有難さ。情には  
押風が、思はず口口  
落したる一聲の風。  
もし蚊蝶を吹拂は  
レ、身の痛みをも  
打忘れて、起直り  
て伏拜める、寝巻  
姿の見えしなるべ  
りぬ。  
「御親切は肝に銘  
じて有難うムい  
ます、みの御恩  
は死んでも決して忘  
疑ひが増すばかりで  
はれては、猶の事異  
ります、みのれ金は  
あつたら、た綱を  
蜘蛛の裡よりは、手を  
本意なげに押風を覗て  
「では如何ぞとも聞て  
十の度越したる事無  
れ、手術の氣氛  
で、老んなら明日は  
て無い。如何にもね  
と思ふ存分にやれ、  
つてやつて呉れ。(○)